

[国 語]

テキストを評価し、意見をもたせるための実践研究

—非連続テキストから情報を取り出し、自分なりの考えを形成する活動を通して—

高野 真也*

1 はじめに

現在までにOECD（経済開発機構）が4回の「生徒の学習到達度調査」（以下、PISA調査）を実施している。2003年に実施した調査の結果において、日本の生徒の学力は、「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」「問題解決能力」については上位であったが、「読解力（Reading Literacy）」の得点がOECD平均程度まで低下している状況にあることが判明した。このPISA調査でいう「読解力」は次のように定義されている。

読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」である。

このような意味合いにおいて、PISA調査の結果は単なるテスト結果ではなく、生きる力を育成するにあたって、極めて重要な調査結果であるといえる。PISA調査では、図表やグラフなどの非連続テキストを読むことも、「読解力」に含めるということを求めている点も注目すべきことである。

平成19年度より文部科学省が開始した全国学力・学習状況調査（以下、全国学力テスト）においては、習得型学習によって身に付けた力を活用することができるかどうかを測ることが重視されている。これは、PISA型読解力の「効果的に社会に参加するために」ということとも深く関係している。個の中に閉じ込められた学力ではなく、社会の中で人と結び付くための基盤となる言葉の力を養うことが求められているのである。2007年に文部科学省が実施した全国学力テストの結果によると、知識・技能にかかわるいわゆるA問題の平均正答率が7～8割に達したのに対して、それらを社会生活の中で活用する力を問うたB問題の平均正答率が相対的に低いことが注目を集めた。

このPISA調査の「読解力」や全国学力テストの結果が示すところは、読解力や記述式の問題、知識・技能を活用する問題に学力上の課題があるということである。国語科に関連した内容でいうと、文章・資料・図表等を深く読み取る力や、学んだことを活用しつつ論理的に考察し、自分の考えを適切に表現する力などが弱いということである。現在の学校教育では、これらの課題となっている学力をいかに育成していくのか、ということが大きな使命となっている。この課題の解決に向けて、どのような授業を具体的に行えばよいのか、どのような指導が有効であるのか、国語科を中心に探究してみたい。

2 主題設定の理由

PISA調査の「読解力」や、全国学力テストの国語B問題などの活用型の問題において、誤答となった問題に共通している原因の一つに、無答が多いことがあげられる。近年5回担任してきた小学校6学年の児童においても、全国学力テストの国語B問題や、新潟県小学校教育研究会主催の学習指導改善調査の国語の問題などの活用型の問題において、正答率の低さに同様の傾向が見られ、やはり無答の多さが課題であった。また、図表やグラフからわかる情報を取り出したり、自分の考えを根拠付けて述べたりすることも苦手であることが分かった。

これらの課題に対して、有効な解決方法を探ることこそ、現在求められている生きる力の育成につながるものと考えている。現在課題となっている学力のうち、図表やグラフなどの非連続テキストを深く読み取る力と、論理的に考察し、自分の考えをもつ力にターゲットを絞って、国語科の学習を中心にそれらの育成を試みることにした。

* 南魚沼市立六日町小学校

3 研究の目的

本研究の目的は、図表やグラフなどの非連続テキストを読み取る力の育成と、事象から自分なりの考えをもち表現する力の育成を合わせて行うことで、論説文の読解力が向上するかどうかを考察するものである。

4 研究の内容と方法

小学校第6学年の児童を対象に以下の3点を目標に指導を行い、目標に対しての指導効果と児童の変容の様子を考察する。

- ・図表やグラフなどの非連続テキストを読み取る力を向上させる。
 - ・根拠を明確にして、自分の意見を構成する力を向上させる。
 - ・上記2点の力を総合し、論説文の読解力を向上させる。

5 実践

(1) 図表やグラフなどの非連続テキストを読み取る力をつける

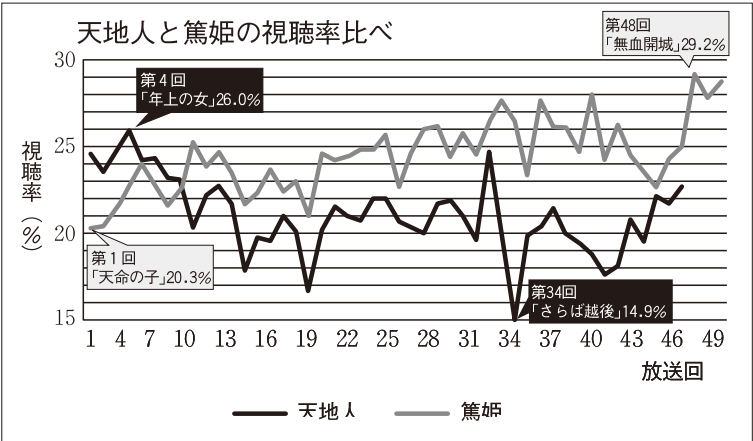
図表やグラフの読み取り方、かき方については、平成20年度から実施の学習指導要領において算数科数量関係の領域において扱うことになっている。また、社会科においては、資料活用として非連続テキストを扱うことになっている。

学年（小学校）	算数科 D数量関係の内容	社会科 資料活用について
第1学年	絵や図を用いた数量の表現	地図（絵地図を含む）や各種の具体的資料を効果的に活用することができるようにする。
第2学年	簡単な表やグラフ	
第3学年	表や棒グラフ	
第4学年	伴って変わる二つの数量の関係（折れ線グラフ） 資料の分類整理（二つの観点の表、折れ線グラフ）	地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用することができるようにする。
第5学年	円グラフや帯グラフ	
第6学年	資料の調べ方（度数分布）	

資料1 算数科、社会科における非連続テキストを扱う学年と内容

非連続テキストの読み取りや活用については、各学年の学習内容に入っているにもかかわらず、あまり定着がみられずに活用できないのは、2つの理由があると考ええる。その1つは、習った後に図表やグラフに接する機会が少ないために、習得が不十分であり、活用できないことである。もう一つは、図表やグラフなどの非連続テキストから正確に情報を取り出すことにのみ時間を割いていて、内容の吟味が不足していることである。例えば、情報について読んだだけでは分からないことを推論したり、読んだことについて根拠を挙げて意見を言ったりといった活動が十分に行われてこなかったためである。

これらの課題を克服するために、さまざまな図表やグラフなどの読み取りを短時間でを行う練習を朝学習の時間などを利用して行った。使用した図やグラフは、社会科の学習において教科書や資料集で資料として使われているものや、児童が興味関心を示すようなものを使用した。そこから取り出すことのできる情報を整理し、その情報だけでは分からないことを推論したり、自分なりの意見を書いたりする活動を行った。その際、算数科で学習したグラフの読み方などを確認し、内容を読み取る際の補助となるようにした。



資料2 読み取り練習に使用した資料の一例「NHK大河ドラマの視聴率比較」

(2) 自分なりの立場を明確にし、意見をもつ力をつける

① ショートスピーチ

全国学力テストの国語B問題や、学習指導改善調査の国語の問題のような活用型の問題が苦手で、無答が多かった児童について分析してみると、日常の授業においても書くことや話すことなどの表現活動を苦手としている児童が多いことが分かる。そのような児童は、作文を書くことにもかなり時間がかかるが、特にスピーチなど人前で話すことを極端に苦手としている。人前で話すことのプレッシャーも原因の一つであろうが、教師が話す内容を明確にするようにフォローすることで、すらすらと話すことができる児童がほとんどであった。つまり、頭の中で自分の話すことをうまく整理することができないことが大きな原因だと考えられる。これらは、日々のトレーニングによって慣れ、改善していくものと考えられる。そこで、毎日短時間でも繰り返しスピーチ活動を行うことで、この課題を改善しようと考えた。

スピーチの方法は、肯定と否定に分かれるようなテーマを教師が提示し、そのテーマについて児童全員が立場を決めて考え、ごく短いスピーチを行うというものである。必ず自分が賛否決定をした根拠をつけることにより、より論理的な考え方ができるように意図した。テーマの設定については、環境問題に関連する事例を多く取り上げ、国語科の「エネルギー消費社会」の学習につながるようにした。以下は、実際に行った例である。

テーマ：スーパーのレジ袋を有料にすることについて

賛成意見「賛成です。レジ袋は石油からできていると聞いたので、地球のためにはあまり使わない方がいいと思うからです。」

反対意見「反対です。今はあまり景気がよくないのにお金を取ると、買い物をしようという気がなくなるからです。」

テーマ：ガソリンの税金を上げることにについて

賛成意見「賛成です。ガソリンを使うと空気が悪くなるので、値段を上げて大事に使うようにした方がいいと思うからです。」

反対意見「反対です。私の家はお店から遠くて車を使うことが多いから、ガソリンの値段が上がってお金がたかさにかかるとは困るからです。」

② 新聞を活用した意見作文

日々移り変わる情報に対して自分なりの立場を明確にする力を付けることを目的に、新聞を活用した。新聞は、社会の時事情報を児童自らが能動的に得ることができる教材としてよく用いられるが、児童の多くは新聞からの情報の読み取りに馴染みが少なく、内容を理解することが容易ではない。実際児童が日常的に多く触れる情報媒体はテレビがほとんどであろう。そこで、新聞を活用する方法としては、一度テレビなどで接した情報と同じ内容の新聞記事を選ぶことにした。そうすることによって、読み慣れていない新聞記事に対して、わずかでも導入をしやすくした。

この活動で重要となるのは、どの記事に対しても必ず自分なりの意見や感想をもたせ、表現させることである。そこで、記事の内容について意見作文を書かせることとし、内容の方向性などについての制限等は設けず、思うままに自由に自分の意見や感想などを作文ノートに記述していくようにした。

作文が苦手な児童の多くは、記事の内容をそのまま写すことが多く、「事実」と「意見」で分けるならば「事実」ばかりの文章となってしまう傾向がある。そこで、作文の内容は前半に「事実」が半分、後半に「意見」が半分ということに統一し、記事の内容から発想した自分なりの考えを必ず入れるようにした。文章にするのが苦手な児童には、箇条書きで自分の意見や感想を書き出させるようにし、そこから少しずつ文章として組み立てていくように支援した。

児童が書いた作文は、他の児童の書いた内容と比べることで、記事を読む視点が多様であることや、説得力のある文章構成を学び合うことができる。意見交換は、となりの席同士のペアで行ったり、5人程度のグループで行ったり、代表を選出して学級全体で行ったりと、形態を変えながら行った。

(3) 論説文教材で読解力をつける

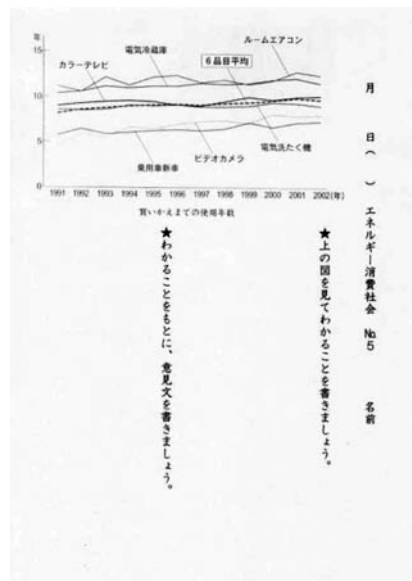
教材文として取り上げたのは「エネルギー消費社会」（平成22年度まで、学校図書 国語6年下に掲載）である。環境問題を扱った内容の論説文であり、筆者は、エネルギーの効果的な利用を呼びかけている。様々な環境問題を示したうえでその対策を示し、筆者の主張で結ぶ形で論が展開されている。本テキストの特徴は、「世界の気温の変化」「二酸化炭素濃度の増加」（折れ線グラフ）「増えていくごみの量とその内訳」（折れ線グラフと円グラフ）等、グラフなどが多く使われていることである。これらのグラフなどは、筆者が事実として記述している文の資料となっており、筆者の主張の拠り所にもなっている。内容を理解するには、図やグラフなどの非連続型テキストを読み取る必要が生ずる。

この単元での目標の一つに、「事実と意見を区別してとらえる」ことがあげられる。しかし、文章中では、「事実」と「意見」が混在した複雑な段落も存在し、児童も判断に苦慮することが予想される。そこでまず、教材文を読む前にその図やグラフを示し、そこから読み取ることができる「事実」を確認し、その「事実」に対する自分の「意見」を持たせることにした。図やグラフから得た情報を元にして自分の「意見」を持った上で文章を読み進めることにより、自分の意見と筆者の主張を比較することができ、内容の読解を容易にすることができるのではないかと考えた。

図やグラフの読み取りにあたっては、ワークシートを使用して、まず個人で読み取ることができることをできるだけ多く挙げる。その上で、他の児童と読み取った内容を発表しあうことで、自力で図やグラフを読み取ろうとする態度を育成し、さらに多様な読み取りの視点があることに気付かせることをねらった。

図やグラフごとに意見文を作成するにあたっては、図やグラフから読み取ったことを「事実」として、「意見」にあたる内容を書くこととした。書かれた意見文は発表し合うことで、互いの考え方や、論理的な文章の書き方を学び合うことができるようにした。

なお、この単元は11月下旬～12月上旬に実施している。



資料3 ワークシートの様式

「エネルギー消費社会」を教材とした単元計画

次	時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
一次	1 ～ 6	○資料からわかる事実をワークシートに書く。 ○事実をもとに、自分の意見をワークシートに書く。 ○教材文を読み、意味調べをする。 ○事実と意見に分けて線を引き、段落をどちらかに判別する。 ※以上のことを資料①～⑥まで行う。	○資料から事実だとわかる内容だけを十分に引き出す。 ○感想文にとどまらないよう助言する。 ○事実と意見を理由づけて判別できるように支援する。	○資料からわかることを読み取ることができたか。 ○事実をもとに自分の意見を書くことができたか。 (ワークシート) ○段落ごとに事実と意見に判別することができたか。 (教材文シート)
二次	7 8	○全文を通読し、今までの学習を手がかりとして本文を3つのまとまりに分ける。 ○まとまりごとに大まかに要点をまとめ、小見出しをつける。	○接続後や指示語を手がかりに、段落相互の関係に着目させる。 ○文章全体の意見と主張の流れをおさえる。	○本文のまとまりに分け、だいたいの内容をつかむことができたか。 (ノート)
三次	9 10	○筆者の主張についての自分なりの意見文を書く。	○筆者の主張する内容について確認する。 ○筆者の主張に基づいた意見文となるように助言する。	○筆者の主張する内容を的確にとらえ、それに対する自分の考えを文章表現することができたか。 (ノート)

6 考察

(1) 図表やグラフなどの非連続テキストを読み取る力がついたか

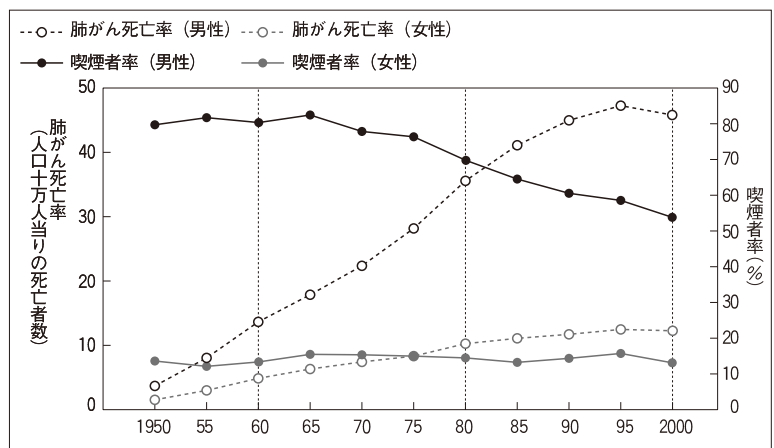
今回の手立てを講じたことによって、児童に見られた変化は、児童が非連続テキストから読み取った内容を書き出した文章量からも、うかがうことができる。手立て前後の読み取り内容を書いたワークシートの行数は、全児童において倍以上増加した。これは、筆者自身も驚くことであった。文章量の増加が、読み取ることができたことを示すとは単純には言えないが、たくさんの情報を読み取っているからこそ視点が増加し、そこに自分の考えが付け加えられて文章量（アウトプット）が増えたのではないかと考える。

また、ほとんどの児童が非連続テキストから読み取ることができる情報だけを取り出すのではなく、推論をしたり疑問をもったりすることができるようになったことも大きな変容であった。このような姿勢は、ただ単に情報を取り出すだけでなく、テキストを解釈し、熟考する段階に入りつつあるといえる。

しかし、全国学力テストや学習指導改善調査などの問題などで求められるような、非連続テキストから必要な情報をピンポイントで取り出す力が向上したとはいえない。状況に応じた情報の取り出しが的確にできるようにすることが、今後の課題である。

以下は、資料4の児童の読み取り（12月実施）の一部である。

- ・タバコを吸うと肺ガンになるといわれているのに、喫煙率が減って、死亡率が上がっているのはおかしい。
- ・男性の喫煙率は減っているのに、女性の喫煙率が減らないのはどうしてだろう。
- ・世の中の流れで、喫煙率は今後も減っていくと思う。肺ガン死亡率もこの後減っていくのではないかな。



資料4 読み取り練習に使用した資料
「喫煙率と肺がん死亡率のグラフ」

(2) 自分なりの立場を明確にし、意見をもつ力がついたか

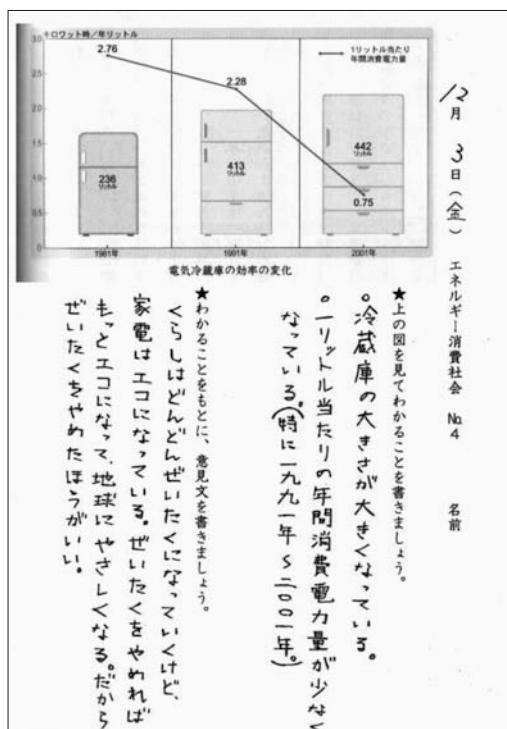
1年間の実践での変化の様子を全体的にみると、特に書くことや話すことなどの表現力の向上が目立った。書くことについては、意見作文の文字数が増加したり、根拠を示して論理的な文章の組み立てをしたりすることができるようになってきたことが挙げられる。新聞を利用した意見作文では、4月当初は新聞に書かれた記事をそのまま写すような文章が多かったが、12月の段階では全員が自分なりの意見を文章中の半分は書くことができるようになった。書くことによって考えたことを整理することができるため、回を重ねるごとに児童それぞれの考え方の傾向が文章に表れてくるのが分かった。

話すことについては、以前は人前で全く話すことができなかった児童が、自分の立場を明確にして話すことができるようになるなど、学級全員にスピーチスキルの向上がみられた。立場を明確にして意見を述べる活動としては、ディベートが有効と言われるが、本実践のような形でスピーチを行うことによって、自然とディベートの様相を呈してることが多々あった。そのようなときの児童の様子は、他者の意見を意図的に聞こうとする姿勢がみられ、また自らもより論理的な発言をしようとするような態度がみられた。話す機会の増加は、同時に聞く機会の増加である。スピーチ活動を頻繁に行うことで、お互いの多様な考え方を知ったり、説得力のある論理的な話し方を学んだりすることができ、お互いに高め合おうとする望ましい姿勢がみられるようになった。スピーチの仕方については、表現力豊かに自分の意見を述べるまでには及ばなかったため、今後の課題としたい。

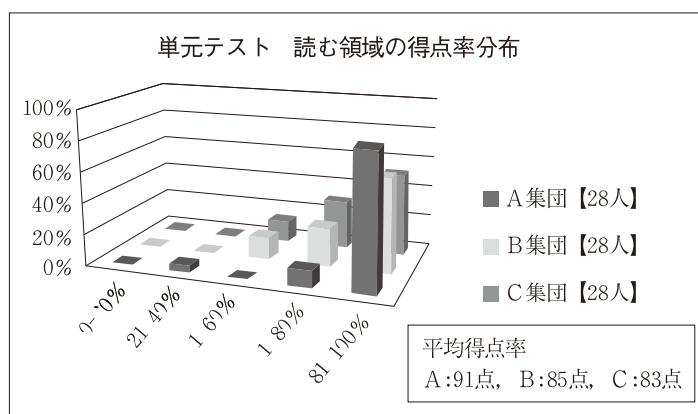
(3) 論説文の読解力が向上したか

教材テキスト「エネルギー消費社会」を読む前に、その中で使われている資料に対して自分なりの意見をもたせる手立てには、いくつかの手ごたえがあった。図表やグラフなどの資料の活用については、この単元までに練習してきた非連続テキストの読み取り練習の成果が表れ、全ての児童が資料に対する自分なりの意見をもつことができた。6つの資料の読み取りをもとにして、テキストを読む前に「エネルギー消費社会」の筆者の論を概ね理解している児童もいた。実際にテキストを読む段階では、「筆者は同じ資料に対してどのように考えたのだろうか」という興味がわき、積極的にテキストを読み取ろうという姿勢につながった。その結果、筆者の主張している内容や、論の進め方を理解するに至り、単元のまとめとして、筆者の主張に対する意見文を全員が書くことができた。

「エネルギー消費社会」の単元後に実施した単元テストでは、実践の対象となったA集団が、同じ学年であるB・C集団と比較してわずかに正答率が高い結果となった。この結果からでは、本実践の有効性を見出すまでにはいたらないが、他の単元における正答率が3集団ともほとんど同じであることを考えると、実践の効果はあったのではないかと考えている。何よりも大きな変化は、児童の授業へ臨む態度であり、図やグラフが読める、筆者の主張を理解することができる、自分の考えが主張できるといった自信が、意欲的な姿勢につながっているものと考えられる。



資料5 「エネルギー消費社会」のグラフの読み取り



資料6 「エネルギー消費社会」単元テストの得点率比較

7 おわりに

平成23年度より新しい学習指導要領が本格実施となり、教育内容に関する主な改善事項として「言語活動の充実」が挙げられた。その背景には、PISA調査や全国学力テストで明らかとなった課題があるといわれている。「言語活動の充実」は全教科において求められているが、その基盤となるのはやはり国語科であると考えている。「聞く・話す・書く・読む」が一体となった活用型の授業へのシフトチェンジが求められる中、これからも、子どもたちの「生きる力」を養うことを目指す国語指導、読解指導のあり方を考え、実践を続けていきたい。

〈参考文献〉

鶴田清司 「読解力を高める国語科授業の改革」, 2008年

有元秀文 「必ずPISA型読解力が育つ七つの授業改善」, 2008年

有元秀文 「PISA調査で、なぜ日本の高校生の読解力は低いのか? (『日本語学』No294)」, 2005年